

くまれ侍りて。

あやめ草薺音をかけて萎れそふ袖のけしきや五月雨の空
かき暮し文めも分ぬ五月雨にいかに薺音を忍びてや経る
雨そゞ軒のあやめの雫にもうきねを袖にかけて佗らん
ほとゞぎすの音なうも、中々其むかしなど覺し佗給ふ
らんと、思ひやり奉て。

引かへてうさとやならん杜鵑むかしかたらふ夕暮のそら
御いたはりの中も、かしづき給はざりしこと、御悔の
ほど誠御理に過て覺候。しかしやつがれは四歳にて父、
七歳にて母に別れ候。かばかりの身も有る世にて候へ
ば、思しめし返されよかしとこそ存じつれ。

一、田中一閑・菊池武康餞別の歌

廿日田中一閑餞別の和歌惠來。短冊に書て吾吟友葛卷氏の
何某、越路の故郷に歸るを送るとて。

歸るとも越路の秋はかならずもきみが心を雁に告げこせ
返し。中々ことたらず候へど、聊御いらへとて申也。
別れゆく越路の空を君もまたはつかりがねに思ひ忘るな

又菊池武康の許送候。むさしの國を旅立侍るとて。

故郷にかへる旅路の今朝だにもなほ忍ばるゝ武藏野の月
返しに。嬉しき御首途の折しも、この野の月の名残も淺
からぬとの御心のほど、いとあはれにかつはしる人と
おぼして、御ことのはにかゝる御心ざしの有がたけれ
ば、とのゐ所になりながら、とりあへずつゞけ侍るに
なん。

忍ぶてふ月の光を武藏野のくさ葉の露にかけてながめん
武藏野の草の庵の庭たづみかはおぬ袖にやどるつきかな
住みなれし野邊の庵の軒の草しのぶにたらぬ月の影かな
武藏野や今宵一夜の草まくら露こそ月のかたみならまし
武藏野の月もなごりの今宵とや片敷く袖に影とゞむらん
更にまた忘れんつまもなつ衣ひと夜かり寝の武藏野の月
故里の千里の外もよしやさはわすれんものか武藏野の月
一、歸國の前夜月を見て

五月廿日の夜、明なば故郷に旅立侍んと物し侍りけるに、
月のいとをかしかりければ、詠めぬてよみ侍りけり、壁上
に書付けぬ。

武藏野の月もなごりの今宵とやかたしく袖に影止むらん
一、能登の殞石

是歲四月能州に殞る星爲石。土人打寄て割之。其石十六日
に郡奉行より執政所へ出之。五月金澤より其割石一つ奉
之。殞る時光あり。其時は柔にして次第に堅實す。江戸へ
越候石は一二寸計、外は瓦の如くにして黒く、内は常の石
とは違ひ、沙のかたまれるやうにして堅し。色青黒うして
重し。